

ちせいの里

里山の樹木

【ツツジ科 アセビ属】

*Pieris japonica* (Thunb.) D. Don

## アセビ

【馬酔木】別名/アセボ, アシビ, ウマゴロシ, ウシゴロシ, アシシビレ

- 常緑低木～小高木
- 高さ: 1～8m
- 花期: 2月下旬～5月
- 果期: 9～10月
- 分布: 本州(山形・宮城県以南), 四国, 九州

参考文献:「山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花」(山と溪谷社) P126



葉は互生(ごせい)で、枝先に集まってつく。普通は、このような倒披針形～長楕円形。

一見、シャリンバイやトバラを思い浮かべたが、これも度としたアセビ。このような幅のある葉もある。



株立ち状になることが多い。樹皮(じゅひ)は、縦に裂け目が入り、ねじれが入る感じは、同じツツジ科のネジキやシャシャンボに似ている。



葉芽(はめ・ようが)。

### 見どころ

- 全株に神経毒の**アセボトキシシン**(アルカロイドの一種)を含む。馬が食べると酔ったようになることから**馬酔木**の字が当てられる。かつては、**駆虫薬**として利用されたこともある。
- シヤクガ科**の**ヒョウモンエダシヤク**の幼虫は、有毒のアセビの葉を食草にして体内に毒を蓄積する。

【モチノキ科 モチノキ属】	Ilex crenata
<b>イヌツゲ</b>	
【 犬黄楊 】 別名 ノヤマツゲ(山黄楊), コバモチ(小葉鶯)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●常緑小高木</li> <li>●高さ: 2~6m(まれに15m)</li> <li>●花期: 6~7月(雌雄別株)</li> <li>●果期: 10~11月</li> <li>●分布: 本州, 四国, 九州</li> </ul>	
参考文献 1) 「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花②」(山と溪谷社)P478 2) 松井宏光, 「葉で引く四国の樹木観察図鑑」(高知新聞社)P405	



葉は互生(ごせい)。葉身は楕円形から長楕円形で、長さ1~3cm。質は厚く、表面には光沢がある。縁には浅い鋸歯(きょし)が並ぶ。両面とも無毛。裏面は淡緑色で側脈は見えない。



核果(かくか)。直径5mmほどの球形。黒色に熟す。樹皮は灰黒色で、皮目が多い。

**似た名前**

ツゲ(ツゲ科)(図1)は、同じぐらいの大きさの葉で一見にて見えるが、葉が対生であることで容易に区別できる。イヌツゲ(図2)は互生。

図1(ツゲ)

図2(イヌツゲ)



**名の由来**

有用材であるツゲに見た目は似ているが、役に立たないという意味。「イヌ」は役に立たないものという意味を持つ。ツゲ材は黄褐色で緻密であり、将棋の駒や印鑑、櫛などに用いられてきた。

【ツバキ科 サカキ属】

Cleyera japonica

## サカキ

【 榊 】 別名 / マサカキ, ホンサカキ, シヤシヤキ, カミシバ

- 常緑小高木
- 高さ: 4~10m
- 花期: 6~7月
- 果期: 10月
- 分布: 本州(茨城県以西), 四国, 九州, 沖縄

### 参考文献

- ・高橋秀男・勝山輝男監修『樹に咲く花』山と溪谷社〈山溪ハンディ図鑑4〉, 2001年, P178
- ・松井宏光, 葉で引く四国の樹木観察図鑑, 高知新聞社, 2002年, P301



果実(左)は初め紅色だが熟すと黒色になる。萼(右)と花柱(右)が見える。直径は7~8mmで、球形。



### 近縁種

「サカキ」の名が付く樹木

サカキ	サカキ属	山地の照葉樹林内
ヒサカキ	ヒサカキ属	里山林
ハマヒサカキ	ヒサカキ属	海岸

### 名の由来

1年中緑色の葉を繁茂させていることから「栄える樹」→「栄樹」。昔から玉串(たまぐし)として、神事に用いられる。榊(さかき)とは、古代では神前に供える木の総称で、ヒサカキ、シキミ、オガタマノキなどもそのように扱われた。いずれの樹木も常緑で、光沢のある厚みのある葉をもつという点で共通している。

【ツバキ科 ヒサカキ属】

*Eurya japonica* Thunb.

## ヒサカキ

【 姫榊 】 別名 / --

- 常緑低木～小高木
- 高さ: 4～10m
- 花期: 3～4月 (雌雄別株)
- 果期: 10～12月
- 分布: 本州(青森県を除く), 四国, 九州, 沖縄

### 参考文献

- 1) 「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花」(山と溪谷社) P188
- 2) 松井宏光, 「葉で引く四国の樹木観察図鑑」(高知新聞社) P302



黒く熟した果実。直径は4～5mm。  
つぶすと鮮やかな紫色の液がでる。これは草木染めの青色染料としても利用される。  
また、果実は野鳥が好んで食べる。



なんと！ヒサカキの果実でお絵かきができる！果実を握りつぶし、汁を出しながら描きます。手も染まりますがなかなか美しいブルーに、子供たちもお絵かきに夢中。



葉は互生(ごせい)、葉身は楕円形、長さ3～7cm。革質で厚く、光沢があり、葉縁には浅い波形の鋸歯(のこぎり)がある。うら面は、淡い緑色。両面とも無毛。

### 見どころ

**葉の先端がとがらず、わずかにへこむ**ことが、ほかの常緑樹と区別する手がかりとなる。

### 名の由来

サカキ(*Cleyera japonica*)の代用に、神事に用いられることがあり、小さいサカキを意味する「姫榊(ひめさかき)」が語源となりヒサカキとなったとする説がある。

【ブナ科 コナラ属】

Quercus myrsinaefolia

## シラカシ

【白樫】 別名 / クロカシ、ホソバガシ

- 常緑高木(じょうりよくこうぼく)
- 高さ: 20m
- 花期: 5月 雌雄同株(しゆうどうしゆ)
- 果期: その年の秋 (1年で成熟する)
- 分布: 本州(福島・新潟県以西)、四国、九州

### 参考文献

- (1) 高橋秀男・勝山輝男監修『樹に咲く花』山と溪谷社(山溪ハンディ図鑑5), 2001年, P260
- (2) 松井宏光, 葉で引く四国の樹木観察図鑑, 高知新聞社, 2002年, P370
- (3) 千葉香三監修, 山陽新聞社, 岡山の樹木, 1989年, P222
- (4) おかやまの自然第2版, 岡山県環境保健部自然保護課, 1993年



ドングリには、1年で成熟するものと、2年で成熟するものがあるが、シラカシは前者。この小さな実が秋にはドングリに生長する。

成熟した堅果(けんか)。殻斗(かくと)の横縞は6~8本あり、これは鱗片が合着(がっちゃんく)したものの。



樹皮は若い灰褐色で平順。成木では茶褐色の皮目(ひく)が縦に並び、深い割れ目になる。

### 見分け方

アラカシ(*Quercus glauca*)、ウラジログアシ(*Q. salicina*)などとは、典型的な葉では分かりやすいが、特に徒長枝や幼木では迷うことも多い。

典型的な葉では、アラカシの方が幅が広いのだが、特にアラカシの葉の形や大きさは変異が大きい。私は鋸歯が葉の1/2までであるのがアラカシ、葉の2/3までであるのがシラカシというふうに区別している。

また、ウラジログアシについても、典型的な葉では葉裏の白さで区別できるが、これもけっこう変異がある。ウラジログアシの方が葉の縁がよれていて、先端が尾状に長くたがることや、冬芽で総合的に判断するようにしている。

【スギ科 スギ属】	学名 : Cryptomeria japonica
<b>スギ</b>	
【杉】 別名 / --	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●常緑高木</li> <li>●高さ: 30~65m</li> <li>●花期: 3~4月 雌雄同株</li> <li>●球果: 10月</li> <li>●分布: 本州, 四国, 九州(屋久島まで)</li> </ul>	
参考文献 山と溪谷社「山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花」P614	



花粉症がもっともひどくなるのは3~4月。まさに花粉をばらまき中の雄花。 雌花。10~11月には球果として熟し、種子を散布する。

● **スギの名前の由来**

幹が真っ直ぐに伸びるところから「直木(スクキ)」、上に進み登る木から「進木(スキ)」、素直な木から「直木(スナオキ)」など諸説ある。いずれにせよ、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などにもスギについての記述があり、古くから人々の生活と深く結びついていたようだ。  
 (参考: 深津正、小林義雄「木の名の由来」(東京選書)pp.142-144、岡部誠「木の名前」(婦人生活社)p124)



球果(きゅうか)。

昨年の雄花か？



葉は針形で、螺旋状につく。先端は鋭く尖る。

かなり熟してきたスギの雄花。枝先に多数つくのが特ちょう。スギは雌雄同株(しゅうどうしゅ)。

【モチノキ科 モチノキ属】	Ilex pedunculosa
<b>ソヨゴ</b>	
【 ー 】 別名/フクラシバ(膨ら柴, 膨らし葉), フクラシ, クロシバ, ヒクラシ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●常緑低木(じょうりよくていぼく)～小高木(しょうこうぼく)</li> <li>●高さ: 3～7m</li> <li>●花期: 6～7月 雌雄異株(しゆういしゆ)</li> <li>●果期: 10～11月</li> <li>●分布: 本州(新潟・茨城県以西), 四国, 九州</li> </ul>	
<b>参考文献</b> (1)「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花②」(山と溪谷社)P468 (2)千葉喬三監修, 山陽新聞社, 岡山の樹木, 1989年	



長さ3～4cmの球形。果柄は長く、熟すと赤色になる。緑の葉に赤い果実はとてもよく目立つのがあまり鳥に人気がないのか、春先まで残っていることが多い。



葉は互生(ごせい)。基部はくさび形で、先端は尖る。縁は全縁(ぜんえん)で波打つ。幼木や徒長枝では小さな鋸歯が表れることもある。両面とも無毛。質は厚く、しなやか。側脈はあまり目立たない。



**名の由来**

「ソヨゴ」は、葉が風にそよぐ様子に由来すると言われている。しかし、ヤマナラシの名が葉がそよぐ音に由来するとされるのには十分に納得できるが、ソヨゴの葉がそんなに心地よくそよいでいるようにはどうしても思えない。私はむしろ、ソヨゴの葉の最大の特徴である葉縁の波打った様子を、「そよいでいる」と表現したのではないかと思うのだが、いかがだろう。

別名の「フクラシバ」「フクラシ」は、葉を火にくべると、内部の水が水蒸気になり、葉が膨らむ特徴を「膨らむ柴」あるいは「膨らし葉」と言ったとされる。岡山県では、ソヨゴよりもフクラシバの方が地域のお年寄りに通じる。



【モクセイ科 モクセイ属】

学名 : Osmanthus heterophyllus

## ヒイラギ

【 柎・柎樹 】 別名 / メツキバラ, ヒヒラ

- 常緑小高木
- 高さ: 4~8m
- 花期: 11~12月 (雌雄異株)
- 果期: 核果(かくか) 6~7月
- 分布: 本州(関東地方以西), 四国, 九州, 沖縄

### 参考文献

- (1) 高橋秀男・勝山輝男監修『樹に咲く花』山と溪谷社(山溪ハンディ図鑑5), 2001年, P290
- (2) 松井宏光, 葉で引く四国の樹木観察図鑑, 高知新聞社, 2002年, P200
- (3) 岡山県編, 岡山県野生生物目録2009, 岡山県生活環境部自然環境課, 2009年



樹皮はやや白っぽい褐色。いぼ状コルク質の皮目が目立つ。老木になると細かな割れ目が目立つようになる。

### 見分け方

これらの区別は私はちょっと自信がない…

	<b>ヒイラギとギンモクセイの雑種</b>
ヒイラギモクセイ	ヒイラギよりも光沢が鈍く、鋸歯は小さく8~10対と数が多い。全縁の葉はほとんどない。
ギンモクセイ	ヒイラギよりも細長くやや薄い。
ウスギモクセイ	<b>ギンモクセイの変種</b> 全縁または多少の鋸歯がある。質は薄く波打つ。
キンモクセイ	<b>ギンモクセイの変種</b> 薄く波打つ。細かな鋸歯があるか、全縁。

### 名の由来

「ひいらぐ木」が由来とされる。「ひいらぐ」とは、ヒリヒリ痛むことの意味だそうだ。(2)

【ツバキ科 ツバキ属】	Camellia japonica L.
<b>ヤブツバキ</b>	
【 藪椿 】 別名／ツバキ、ヤマツバキ、カタシ 英名／Camellia	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●常緑高木</li> <li>●高さ: 10～15m</li> <li>●花期: 2～4月</li> <li>●分布: 本州、四国、九州、沖縄</li> </ul>	
<b>参考文献</b> 1) 「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花②」(山と溪谷社)P170 2) 松井宏光, 「葉で引く四国の樹木観察図鑑」(高知新聞社)P299	



葉身12cm, 葉柄1.5cm, 幅6cm  
 葉は互生(いせい)。葉身は楕円形から卵状楕円形, 長さ5～10cm。縁には細かな鋸歯(きょし)が並ぶ。鋸歯の先端が黒色になるのも特徴。両面とも無毛だが、裏面には黒っぽいツブツブが見える。おそらく気孔だと思うが確認できていない。ちなみに、同属のサザンカは主脈上に毛が密生している。葉脈は裏面に隆起しており、日光にかざすと黄色に透けて見える。葉は裏面にむけて反っていることが多い。



葉は互生し、革質で厚い。上面には光沢があり、縁には細かな鋸歯(きょし)がある。両面とも無毛。



蒴果(くわくわ), 直径3～5cmの球形。褐緑色に熟すと3裂して、3～5個の種子を出す。種子は、木化した中軸に集まって付く。種子には良質の油が含まれており、**椿油(つばきあぶら)**と呼ばれる。髪髪料や食用などに用いられる。



中央にある丸いのが、**花芽(はなめ-かが)**。その下にある紡錘形(ぼうすいけい)のものが、**葉芽(はめ-よが)**。  
**花芽は、必ず枝先の葉腋(ようえき)につく。**

雄しべが下の方で合着(ごうちゃく)して筒状になっている。また、基部では花弁とも合着しているため、離弁花であるが花期の終わりに花ごと落下する。  
 ※サザンカは合着がよわいため、花弁と雄しべはばらばらになって落ちる。



樹皮(じゅひ)は褐灰色でなめらか。これは、山の中に自生していたもの。

【ショウワワビスケ】  
 一名を「ハツカリ」ともいうワビスケの園芸品種。花は淡い桃色でほのかな香りがあるとのこと。

### 名の由来

葉が厚いことから「厚葉木(あつばき)」、葉に艶があることから「艶葉木(つやばき)」に由来する説や、花が刀の鐔(つば)に似ていることに由来する説、朝鮮語の「Ton-baiou」に由来する説などがある。

【ブナ科 コナラ属】

Quercus serra

## コナラ

【 榎栢 】 別名／ カシワナラ(栢榎), ハハソ(柞), ホウソ

- 落葉高木
- 高さ: 25m
- 花期: 4月 雌雄同株
- 果期: その年の秋に熟す(1年で成熟)
- 分布: 本州(岩手, 秋田県以南), 四国, 九州
- 生育地: 山地や丘陵地の日当たりの良い雑木林

### 参考文献

「山溪ハンディ図鑑3 樹に咲く花 離弁花①」(山と溪谷社) P229



堅果は1年で成熟する。殻斗(かくと)は、鱗片(りんぺん)が鱗状に並んでいる。先端には柱頭(ちゆうとう)の痕跡が残る。

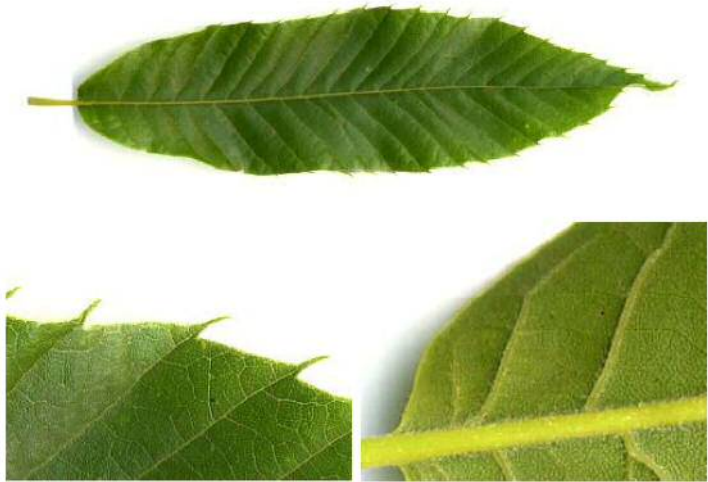


樹皮(じゆひ)には灰黒色で、縦にごつごつとした不規則な割れ目ができる。頂芽(ちようが)のまわりに、頂生側芽(ちようせいそくが)と呼ばれる側芽(そくが)がある。若木では、灰白色で平坦。白い縞模様は、若木のころの樹皮のなごりである。

【ブナ科 クリ属】	Castanea crenata
ク リ	
【栗】 別名 / シバグリ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 落葉高木</li> <li>● 高さ: 17m</li> <li>● 花期: 6月 雌雄同株(しゅうどうしゅ)</li> <li>● 果期: その年の秋</li> <li>● 分布: 北海道(石狩・日高地方以南), 本州, 四国, 九州(南限は屋久島)</li> </ul>	
<p>参考文献</p> <p>1) 「山溪ハンディ図鑑3 樹に咲く花 離弁花①」(山と溪谷社) P278  2) 室井紳・清水美重子, 「ほんとうの植物観察2」(地人書館) P66-67  3) 深津正, 小林義雄, 「木の名の由来」(八坂書房)</p>	



葉は、アベマキやクスギに非常によく似ていて、紅葉もなかなか美しい。だが、鋸歯(きょし)の先にまで葉緑素が入っており、緑に見えるのが特ちょう。



葉は互生(ごせい)。基部は円形か浅い心形、先端は細く尖る。縁には細く尖った鋸歯(きょし)がある。側脈はやや直線的で、間隔が詰んでおり、葉縁に達する。表面は主脈上にうっすらと星状毛(せいじょうもう)があり、裏面も脈上に星状毛がある。質は革質でしっかりとしている。



おなじみのクリの堅果(けんか)。イガは、ドングリで言う帽子(かかと)が変化したもの。成熟すると、殻斗は4裂し、中から堅果が通常3つ現れる。頂部には柱頭の跡が残っている。栗の殻は果皮、渋皮は種皮に相当し、我々が食べる部分は種子である。渋皮にはタンニンを多く含み、栗を食べるリスやネズミなど小動物の食欲を抑制する働きがある。食べきれない果実は地中などに隠され、結果的に散布されることになる。

【リョウブ科 リョウブ属】

Clethra barvinervis

## リョウブ

【 令法 】 別名／ハタツモリ

- 落葉小高木(らくようしょうこうぼく)
- 高さ: 8~10m
- 花期: 6~8月
- 果期: 10~11月
- 分布: 北海道(南部)本州, 四国, 九州  
低地から, 標高1900mの山岳まで広く分布する。

参考文献:「山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花」(山と溪谷社) P164



葉は互生(ごせい)し、枝先に集まってつく。先端はやや尾状に尖り、基部はくさび形。表面は無毛、裏面は主脈上と葉腋(ようえき)にわずかに毛があるが目立たない。縁に沿うように、細く尖った鋸歯(きょし)が細かく並ぶ。葉柄(ようへい)や主脈は赤味を帯びていることが多い。



【トウダイグサ科 アカメガシワ属】

*Mallotus japonicus* Muell.Arg.

## アカメガシワ

【赤芽柏】 別名/ゴサイバ, サイモリバ, アカガシワ

- 落葉高木(らくようこうぼく)
- 高さ: 5~10m
- 花期: 6~7月
- 果期: 10月
- 分布: 本州, 四国, 九州, 沖縄

### 参考文献

1) 「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花②」(山と溪谷社) P204



2003.6.28 岡山県加茂川町



2003.6.28 岡山県加茂川町



葉は互生(ごせい)。基部は心形, または円形。先端は尖る。葉柄は長く赤味を帯びる。通常、全縁(ぜんえん)だが、浅く2~3裂する場合も多い。表面の葉身基部の両側に腺体がある。全体に星状毛(せいじょうもう)が多く、特に脈上には多い。

### 名の由来

「アカメ(赤芽)」は新葉が赤みを帯びること由来。「カシワ(柏)」は、食べものを盛る葉の意味。

アカメガシワは別名をゴサイバ(五菜葉), サイモリバ(菜盛葉)などという。葉が大きく、かつては食べ物を盛ったようだ。(→[○○カシワ](#))

### 岡山県情報

河原や荒地, 崖, 林縁などにいち早く進入するパイオニア種。

【ミカン科 サンショウ属】	Zanthoxylum schinifolium
<b>イヌザンショウ</b>	
【 犬山椒 】 別名 / ヤマザンショウ, イヌザンシヨ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 落葉低木(らくようていぼく)</li> <li>● 高さ: 1.5~3m</li> <li>● 花期: 7~8月 雌雄異株(しゆういしゆ)</li> <li>● 果期: 9~10月</li> <li>● 分布: 本州, 四国, 九州</li> </ul>	
<p>参考文献</p> <p>「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花②」(山と溪谷社) P248  室井綽・清水美重子著「ほんとうの植物観察2」(地人書館) P92-93</p>	



葉は互生(ごせい)。奇数羽状複葉(きすうじゆうふくよう)で、小葉(しょうよう)は6~11対。小葉の基部はくさび形で先端は尖る。縁には鈍鋸歯(どんきょし)が並ぶ。葉裏や、鋸歯のくぼんだ部分に油点がある。葉軸にも細かな刺がある。



老木の樹皮(じゆひ)。刺が巨大化している。どのような成長を経てこのようになるのだろうか？

直径が20cmほどの大木が数本狭い範囲に自生していた。どの個体も同様に、南側の刺は小さく、北側のものはコブ状に大きく成長していた。

近縁種

	刺と葉のつき方	小葉の鋸歯	果実
イヌザンショウ	互生	鋸歯が多い	3個の分果
サンショウ	対生	鋸歯が少ない	2個の分果

※カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* は、3個の分果

名の由来

「イヌ〇〇」と名のつく植物の多くは、“本物に劣る(役に立たない)”という意味が込められている。イヌザンショウの果皮は、刺激はあるものの、かすかに香りが口に広がる程度。サンショウは、口の中が麻痺するほど刺激が強い。

【ミカン科サンショウ属】 Zanthoxylum ailanthoides Siebold et Zucc.

## カラスザンショウ

【烏山椒】 別名／アコウザンショウ、カラスノサンショウ、オオザンショウ

- 落葉高木 (らくようこうぼく)
- 高さ: 15m
- 花期: 7~8月
- 果期: 11~1月
- 分布: 本州, 四国, 九州

### 参考文献

- (1) 高橋秀男・勝山輝男監修『樹に咲く花』山と溪谷社〈山溪ハンディ図鑑4〉, 2001年, P244
- (2) 松井宏光, 葉で引く四国の樹木観察図鑑, 高知新聞社, 2002年, P126



葉は互生(ごせい)、奇数羽状複葉(きすうじゆうふくよう)で小葉(しょうよう)は、6~11対、基部はくさび形で、先端は細く尖る。縁には鈍鋸歯が並び、くぼんだところが腺点(せんでん)になっている。両面とも無毛、裏面は網目状の細脈(さいみゃく)が目立つ。光に透かすと腺点が明るく見える。葉軸は赤味を帯び、無毛。



幹には短いとげがある。老木になると、とげはなくなり、イボ状の突起のみが残る。



老木になると棘の台座のみが残る。



若い枝の棘は赤味を帯びており鋭い。触れるとかなり痛い。



【ウルシ科 ウルシ属】	Rhus trichocarpa Miq.
<b>ヤマウルシ</b>	
【山漆】 別名 ノカブレノキ(岡山県有漢町にて)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●落葉低木(らくようていぼく)</li> <li>●高さ: 3~8m</li> <li>●花期: 5~6月 雌雄異株(しゆういしゆ)</li> <li>●果期: 9~10月</li> <li>●分布: 北海道, 本州, 四国, 九州</li> </ul>	
参考文献: 「山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花」(山と溪谷社) P276	



美しく紅葉したヤマウルシ。典型的な陽樹でパイオニアプランツ。林縁部から長く枝を伸ばし、枝先に大型の奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)を束生状につける。秋の紅葉は「楓(カエデ)さへまけんうるしの紅葉かな」といわれるほど、鮮やか。



葉は奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)、互生(ごせい)。小葉は4~8対、基部はくさび形、先端はやや尾状にとがる。葉軸(ようじく)や小葉柄(しょうようへい)には、軟毛が密生し、やや赤みを帯びることが多い。吉備高原では、ヤマハゼと同様な生育環境にあり、見た目もよく似ているが、ヤマハゼよりも、本種のほうが、小葉の幅があり、ふっくらした感じがする。

近縁種

	葉軸	葉の縁	果実
ヤマウルシ	軟毛がある	全縁, 幼木は鋸歯あり	球形, 表面に刺毛
ヤマハゼ	毛が密生	全縁	扁平, 表面は無毛
ハゼノキ	無毛	全縁	扁平, 表面は無毛
ヌルデ(フシノキ)	翼がある	鋸歯有り	扁平, 表面に細毛, 白い結晶あり

見分け方特集！！

## ウルシ科の葉

どちらもウルシ科で、奇数羽状複葉(うじょうふくよう)で、よく似ている。これに、ヤマウルシとヌルデを加えたいところ。

### ●ハゼノキ

ハゼノキは、葉の形がスマートで紅葉が美しいため庭木としても人気があるが、体質によってはかぶれることがある。



葉軸が無毛。  
※画面上が葉先。



ハゼノキの方がヤマハゼより若干細長い。

### ●ヤマハゼ

西日本に多い。単にハゼと呼ばれることもある。やはり体質によってはかぶれることがある。



葉軸の上面にたくさんの毛が生えている。  
※画面下が葉先。



### ●ヌルデ



発達した翼(よく)が何よりも特徴的。  
※画面下が葉先。



### ●ヤマウルシ



葉軸から主脈にかけて軟毛が密生している。  
※画面上が葉先。



【ツツジ科 ツツジ属】	Rhododendron macrosepalum
<b>モチツツジ</b>	
【 餅躑躅・鷄躑躅 】 別名 ノイワツツジ、ネバツツジ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●常緑低木</li> <li>●高さ: 2m</li> <li>●花期: 4~6月</li> <li>●果期: 夏~秋</li> <li>●分布: 本州(静岡・山梨県~岡山県), 四国</li> </ul>	
<b>参考文献</b> 1) 「山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花」(山と溪谷社)P42 2) 松井宏光, 「葉で引く四国の樹木観察図鑑」(高知新聞社)P287	



通常雄しべは5個あるが、まれに10個近くあることもあるらしい。写真のものはいずれも5個確認できる。

雌しべは1個あるが、左の写真は普通にまっすぐ伸びているのに対して、右の写真では花弁上部の裂片に触れるぐらいに湾曲しているのが分かる。これにどんな意味があるのかよく分からないが、あんなに湾曲しては、仮にアゲハチョウなどが訪れても受粉は難しいような気がする。あるいは、左が雌性期、右が雄性期(になりかけ)と考えてもよいのだろうか。



葉の両面とふちには、毛がたくさんあるが、中に腺毛(せんもう)が混じるためねばる。



つほみや萼片(がくへん)にもびっしりと腺毛(せんもう)が生えている。

腺毛の役割については諸説あるが、その粘りけで害虫がつくのを防いでいるというのが一般的である。確かにアブラムシなどは十分防ぐことができるだろう。また、アリによる盗蜜を防ぐ効果もあるだろう。この写真でも小さな虫が身動きできなくなっているのが確認できる。(左写真で4匹 1のところ)

#### 見どころ

● **キシツツジ** *Rhododendron ripense*と似るが、本種の方が萼片や花柄の腺毛が多い。また、本種の雄しべが5本なのに対して、キシツツジは10本である。

● 江戸時代には多くの園芸品種が作られた。

#### 名の由来

全体に長く柔らかい繊毛が多く、粘ることに由来。別名のネバツツジも同様。